和子

　遠くに見える光。
光に近づきたくて、答えを知りたくて、夏の暑い日に少年は走りだした。
ちかちか光る『それ』は、この世の果てにつながっている気がした。
そこにたどり着けば世界が変わると少年は信じた。

　山橋　和子は両手に花束を抱えて途方に暮れていた。道路沿いに設置されたバス停には屋根などなく、夏のきつい直射日光が容赦なく和子を照らしつける。

滝のような汗を拭いたくても、両手は塞がってしまっていた。

例え、バスが来たとしても両手いっぱいの花束を抱えて載るのは容易なことではない。もし混雑していたら迷惑になるだろう。

　同僚に送って行こうかと声をかけられた時に、素直に頷いておけば良かったと和子は今さらながら後悔した。最後に長く通った道を、記憶に残しておこうなどという感傷的な理由で断った自分が憎らしい。

　和子は今日、長く勤務した保育園を退職した。年齢的な制限と、地元に転勤で帰ってくる娘のためだった。長い間離れて暮らしていた分だけ、娘が戻って来ると分かった時、和子は踊りだしたいぐらい嬉しかった。

昨年、夫を亡くしたばかりで一人暮らしになってしまった和子を気遣って、娘が転勤願いを出してくれたのだ。一人娘の孝行に報いるために、和子は娘と過ごす時間を増やそうと決めた。一緒に過ごす時間を増やしたい、娘にとって良き母親でありたい、強く和子は思い、誓った。

　ふと、背後にある公園から子どもの甲高い声がして和子は振り返った。公園といっても、木ばかりがあるだけで遊具は滑り台とブランコしかない。保育園では、散歩コースとして使っていた。

「兄ちゃん、待ってよ！」

　六歳ぐらいの男の子が半ベソをかきながら、必死に誰かを追いかけている姿が見える。

気になった和子は公園に入り、男の子が駆けて行く先に視線をやった。

男のよりやや年上に見える少年が、苛々とした顔で後ろから走って来る子どもを睨みつけている。まだ幼さの残る顔立ちが、二人ともよく似ていた。

将太

　夏木　将太は苛立ちのこもった眼差しで、足の遅い弟・夏木　良太を睨みつけて怒鳴った。

「遅いぞ、良太！」

　行動がとろくて泣き虫のくせに何処へ行くにも着いてきたがる良太は、将太にとって足手まといでしかない。だが、放っておくと両親に叱られるので仕方なく将太は良太の面倒を見ていた。

　緑が覆い茂る公園の出口に将太は立っている。ここから先は山裾で、深い森に繋がっていた。山からの冷気が走ってきて火照った身体に気持ちがいい。

ささくれ立っていた将太の心が落ち着いていく。

　将太の目の前には、立ち入り禁止と赤いペンキで書かれた看板がある。

「今日こそ、遠くに見える光を確かめに行くって言っただろ！早くしないと、父ちゃんと母ちゃんに見つかっちまうぞ！」

　両親が共働きで日中は家に誰もいないので、将太は好きなように過ごしている。ただし、いつも良太というおまけ付きではあるが。

　立ち入り禁止区域に行く大冒険は両親がいない時でなければ出来ないのだ。母親が帰宅する夕方までには冒険を終えて帰宅しなければ、兄である将太が怒られる。

「う、うん。分かった」

　良太は泣きべその顔を拭った。鈍い弟だが、自分に素直に従う様子は可愛いものがある。将太は良太の手を握ってやった。

「よし、行くぞ」

　今日こそ確かめるのだ。光の正体を。期待と不安に将太の胸が高鳴る。

将太は握った手に力を込めると、立ち入り禁止区域に足を踏み入れようとした。

「こら！そこは入っちゃ駄目な場所よ。戻ってらっしゃい」

　突然、予期せぬ女性の声がして緊張していた将太は飛び上がらんばかりに驚いた。良太も兄の動揺に

呼応するように、将太にしがみついて声を上げた。

慌てて振り返ると、母親よりも祖母に近い年齢の女性が大量の花束を抱えて、こちらを見ている。見覚えのない顔に将太は警戒心を抱いて、良太を自分の背後に回した。

「おばさん、誰？」

　なるべく鋭い声を出してみたが、女性は怖がる様子もない。

「この近所にある保育園の先生よ。今日でお終いだけどね。そっちは危ないから、行っちゃ駄目なのよ」

　女性は花束を地面に置き、あやすように将太たちに手招きをしてみせた。

「やだよぉ！今日行かなくちゃ、もう光を見に行けないよう！」

　良太は叫ぶと、またグスグスと泣きだした。

「光？」

　きょとんとした顔で女性が首を傾げる。良太のおしゃべりめ、内心で将太は毒づいた。

「そうだよ、僕たちはあれを見に行くんだ」

　将太はおばさんを睨みつけたまま、立ち入り禁止区域の森の先に見える光を指差した。おばさんは光を見て、何度か頷いてみせた。

和子・２

（鉄塔の光だわ）

　和子は少年たちの目指す光の正体を知っていた。森の先には高さ六十メートルを超える鉄塔があり、その鉄塔に設置された航空障害灯の機械が光っているのだ。

教えようとして和子は思いとどまった。光の正体を調べに行こうとしている、純粋な少年たちの夢を壊してしまうのは気が引けた。夢を壊さないために、和子は少し工夫してみることにした。

「あれはね、行ってはいけない場所なの。あそこは別の世界への入り口なのよ。元の世界に帰ってこられなくなったら困るでしょ」

　小さい子どもを怖がらせるには十分な嘘だと和子は微笑んだ。

狙い通り、目の前に立っている幼い顔をした少年たちはあんぐりと大きな口を開けている。兄と思われる少年の方は警戒心こそ強そうだが、まだまだ子どもじみた話し方をしているし、この程度の嘘で十分に通じるだろう。

「やっぱり本当なんだ！あそこは世界の果てなんだ！」

　男の子が興奮したように飛び跳ねて、和子は驚いた。てっきり怖くなって黙り込んだと思っていたのだ。男の子は笑顔で兄と思われる少年と繋いだ手を振りまわしている。

「え？」

　予想外の反応に驚いた和子は困って兄の方を見たが、少年の表情は険しかった。

「この森に満月の夜は入るなって言われたんだ。人攫いが出るからって。でもそんなの大人の嘘っぱちだ。僕は行くからな」

　少年の挑みかかるような話し方に和子は戸惑いを覚えた。

一体、この少年はどうしてこんなに森の先にある鉄塔の光にこだわるのだろう？

「どうしてそんなに光を見に行きたいの？良かったらおばちゃんに教えてくれないかしら？」

　保育園の先生として園児たちを宥める時の声を使って、和子は細心の注意を払って問いかける。下手な言い方をすれば、少年はすぐにでも弟の手を握って、森へ飛び込んでいきかねない迫力がある。

　少年は和子が信用できる人物かどうか迷っている様子だったが、敵意のない和子の表情に表情を和らげた。それでも、はっきりと話すつもりはないらしく口の中でもごもごと呟く。

「僕たちは明日この街から引っ越すから、その前にどうしても光を見に行きたいんだ。クラスの奴ら、行ってみたこともないくせにあそこには何も無いって言うから、僕が見てきてやる。みんなが言ったことない場所に、一番乗りしてやるんだ」

　俯いているが、少年の決意は固そうである。きっと内向的な性格なのだろうが、負けん気は強いようだ。子ども特有の意地の強さである。保育園にも、同じような園児がいたのを和子は思い出す。こういう子どもは言い出したら、絶対にやり遂げるまで諦めないものだ。

　和子は悩んだが、少年たちと一緒に鉄塔まで行くことにした。バスに乗り遅れるし、帰宅が遅くなるが、少年たちを放っておくことは和子の母性が許さなかった。
二人は和子がいなくなったら間違いなく森に入ってしまうだろうし、将太の幼いプライドを守るためにも真実は、今、口には出来ない。

「分かったわ。おばさんも一緒に行く。おばさんは山橋　和子っていうの。仲間に入れてね」

　精一杯の笑顔を見せると、幼い少年の方が嬉しそうに笑い返してくれた。兄の方は憮然とした表情で頷きもしなかったが、無理にでも着いて行くしかない。

「僕ね、良太っていうの。こっちは僕のお兄ちゃんで将太っていうんだよ」

「将太！知らない人に名前を言うなって言われているだろ！」

　厳しい兄の声に、良太と名乗った男の子はまだ半ベソになってしまった。

「あらあら、ちゃんとしているのね。偉いわ、将太君。でもおばさんは名前を名乗ったから、もう知らない人じゃないわ。お友達よ」

　むすっ、とした表情を崩さない将太に和子は不安を覚えたが、良太が和子の手を握って来たのを見ると将太は諦めたようにため息をついた。弟がなついたなら仕方ないと思ってくれたらしい。

（兄弟仲がいいのね）

　一人娘のことを思い出し、和子は笑みを浮かべた。若い頃から仕事漬けの日々で、もう一人子どもを産んで育てるなんて到底考えられなかったが、今こうして仲の良い兄弟を見ると、無理をしてでも産めば良かったかもしれないという遅すぎる後悔が和子の胸を掠めた。

将太・２

　将太が先頭になって歩き、後から手をつないだ和子と良太が続いた。

知らないおばさんが仲間に入ったのは、将太には計算外だったが森に入るという行為を止められなかったので大目に見ることにした。光の場所へ行くのに邪魔をされなければ、別に何人いようが構わない。

　黙々と歩いていると、クラスで馬鹿にされた不愉快な記憶が甦ってくる。身長が低く、運動神経も大して良くない将太はクラスの男子のからかいの対象にうってつけだった。将太は小学校の頃から背が小さく、中学に進んでも身長はなかなか伸びない。まだまだランドセルが似合う体格の将太が何か失敗する度に、男子はお決まりのセリフを浴びせてきた。

『将太はまだ小学生だから』

　それがクラスでの将太に対する認識で、言われるたびに将太はひとり唇を噛んで涙を堪えた。

そんな時に学校で奇妙な噂が流れた。

「満月の晩に、森で人攫いが現れて光がある場所へ連れ去って行ってしまうらしい。光がある場所は別の世界へ通じているから帰ってこられなくなる」

　みんな、その噂に夢中になったが誰も確かめに行こうとはしなかった。馬鹿らしいと口では言いあいつつも、皆怖かったのだ。

自分は臆病者ではない、皆に噂を確かめたということを突き付けて自分が子どもではないことを証明してやろうと決めた。転校する前に、どうしてもクラスの奴らに目に物を見せてやるのだ。

　将太は鼻息荒く、光を目指した。満月の晩を待っていたために、確かめるのが引っ越しする前日というぎりぎりになってしまったが、今日のチャンスを逃さなければ証明してやれる。興奮と喜びが将太の中を支配していた。

　森の中はひたすら緑が覆い茂っているだけで、他には何もない。目印になるような建造物はなく、帰り道が危ういと将太は内心で危惧した。顔には出さなかったが、将太は先ほどの高揚感と同じぐらい不安を感じていた。どこまで行っても似たような風景が続くさまは、将太が日常に感じている息苦しさを無意識に思い出させた。

　中学に入学して、将太はすぐに環境に馴染むことが出来なかった。それは来年二年生になる今でも変わらない。

将太は中学生になってから生まれて初めて、自分の日常を恐ろしく思うようになった。
みんな同じ服を着て、同じような無表情で授業を受けて、同じ話題に同じ反応をして、繰り返し、繰り返し同じ日が続いているような錯覚を覚えた。

しかし、錯覚しているのは将太だけで、みんなは回り続ける同じ日を当然のように過ごしている。

　この息苦しさは何だろう？なんでみんな同じ行動をするんだろう？

突然失われた個性に、将太の幼い心は大きくかき乱された。

　だから、将太は光を目指すことにした。同じ日が続く変わり映えのない日常を、自分の手で壊したいのだ。

和子・３

　急に寒さを感じて、和子は反射的に首をすくめた。真夏だというのに、首筋に吹き付けた風が冷たい。

（そろそろ夕暮れなのかしら？）

　森の中は薄暗く、時間感覚が鈍る。腕時計を忘れてきたことを和子は悔やんだ。早くこの冒険を終わらせて、暗くなるまでに子どもたちを家に帰してあげなければならないのに。夕食の時間になっても子どもが帰ってこないと、親、特に母親は心配する。

自分も娘が帰ってこないとやきもきして、玄関をうろうろとしたものだ。懐かしい記憶を思い返しているうちに、和子は昔、父親に聞いた話を思い出した。

　まだ和子が手をつないでいる良太と変わらない年の頃に、父から森の先にある鉄塔に近づいてはいけないと言われたことがあった。

父にきつく言われてなければ、自分も好奇心に駆られて、目の前にいる少年たちと同じように光を目指したかもしれない。

（そうだ、父は森に化け物が出るって言っていたわ）

　今の時代は人攫い、昔は化け物。いつの時代でも子どもを怖がらせて危険な場所へ行かせまいとする、大人の嘘はあるものだ。

　先ほど、将太は『大人の嘘っぱち』だと言ったが、子どもを守るための嘘もあるのだと和子は教えてあげたくなった。傷つける嘘だけでなく、誰かを助けるための嘘も世界にはあるのだと。

（私は自分の娘に、きちんと教えてあげられたのかしら。今まで余裕なく過ごしてきて、大事なことを伝え忘れてしまっているかもしれない）

　いつからだろう。

両親は毎日、同じことを繰り返し行うようになった。仕事、喧嘩、仕事、喧嘩。毎日飽きずに繰り返す両親を、和子はどこか冷めた目で眺めていた。決してこんな大人にはなるまい、そう決めた和子だったが、現実は仕事一筋の人生だった。

気がつけば、同じ毎日を繰り返して生きる退屈な大人になってしまっていた。夫も自分と同じように仕事漬けの毎日を送り、ぽっくりと逝ってしまった。

仕事漬けの両親を見て、娘は自分たちを幼い日の自分と同じように軽蔑したりしただろうか。考えると胸が痛む。

娘には随分と寂しい子ども時代を送らせてしまった。もう遅いのかもしれないが、娘が帰ってきたら、いつも傍にいる母親になろう。優しく話を聞いてあげる良き母親になろう。

　和子は改めて決意を固めると、将太と良太を見た。

（この子たちを早く親御さんのところに帰してあげなくちゃね。いい母親としての一歩だわ）

　和子が冗談めかして考えていた時、背後で何かが走る音がしたが誰も気がつかなかった。

「おばちゃん、寒いよう」

　良太が甘えた声で和子にしがみついてきた瞬間だった。
　辺りが突然、電灯を消したように真っ暗闇に包まれた。

「怖いよぉ！」

　鳴き声を上げて良太がしゃがみこみ、将太は恐怖のあまり立ち尽くした。

「な、何？日が暮れたの？」

　激しく動揺しながら和子は常識的に事態を理解しようとしたが、闇があまりにも深すぎる。日が暮れるとしても急すぎたし、何よりこんな闇を和子は経験したことがなかった。

　とっさに和子は少年たちを抱きかかえたが、和子自身どうしようもなく震えていた。
　ふと頬に冷たいものが触れ、和子は身体を強ばらせた。白いものがちらちらと闇の中に浮かんで見える。

「これは、ゆ、雪？」

　今は夏だというのに、三人の頭上からは雪と思われる物体が降って来た。肌にあたる白い物体は冷たく、疑いようもなく本物の雪である。

「に、兄ちゃん！兄ちゃん！おばちゃあん！」

　良太が震えた声で叫び声を上げながら、ジタバタと転びながら後ずさった。

尋常ではない声に、将太と和子は息を飲んで良太が見ている方向を振りかえった。

「わぁあああああ！」

　和子も将太のように悲鳴を上げて取り乱したかったが、もはや声を自由に出すことが出来ないほどに彼女の身体は恐怖に支配されていた。

将太・３

　振り返った先には『白いもの』がいた。

それは、人型をしていたが人間ではないのは一目で分かる。全身が真っ白く、硬そうな皮膚（？）をしていた。顔と思われる部分には、黒い丸のようなものが三角形と同じ配置で三つついている。声も音もなくいきなり現れた『白いもの』からは、まるで生物の気配を感じない。まるで無機質な機械が目の前に置かれているようだと、震える身体で将太は考える。

「な、何だよ！来るなよぉ！」

　怒鳴ってみても、『白いもの』はじっと止まっているだけで動かない。やはり、機械なのだろうか？

　すると、突然『白いもの』は三人に向かって進んできた。三人は悲鳴を上げた。

『白いもの』は大人の和子よりも遥かに大きく、二メートルはありそうな体格で音もなく近づいてくる。和子と良太は怯えが頂点に達したらしく、その場に座り込んでしまった。

　将太は地面にあった石を掴んで『白いもの』に力いっぱい投げつけた。

「来るな、来るな！お前なんかあっち行け、化け物！」

　石をいくら投げつけても『白いもの』はまるで怯まない。正体は分からないが、異質な空気をまとった『白いもの』からは決して安全な気配は感じない。将太は懸命に石を投げ続ける。

　『白いもの』が低く屈んだように見えた瞬間、姿が視界から消えた。

和子と将太は息を飲んで、言葉を失った。現れた時と同様、いきなり消えたのだろうか。期待を込めてそう考えた二人の希望的推測を打ち砕くように、良太の悲鳴が響いた。

「うわぁあああん！兄ちゃん、兄ちゃーーん！やだよぉお、助けてぇえ！」

　いつの間にか『白いもの』は良太を硬そうな腕で抱え上げていた。

「良太！化け物、良太を返せ！」

　将太は勢い良く『白いもの』に飛びかかったが、すごい速さで『白いもの』は将太をかわして走り出した。

「いけない、良太君が！」

　子どもを攫われて、和子がようやく恐怖の呪縛から逃れた。

『白いもの』が走って行った方向は鉄塔の方向である。鉄塔のある場所は山奥で道が険しい。

「行かなくちゃ、早く、早く！」

　震える膝を叩きながら、和子が走り出していくのを将太は地面から確認した。

　『白いもの』によけられたせいで、将太の身体は地面に叩きつけられ身体中が痛んだが、良太が攫われたのだ。痛がっていたり、怖がったりしている場合ではない。

将太は涙目のまま、全力で『白いもの』の後を追いかけた。

将太・４

　光が見えた。大きな鉄塔の一番上が光っている。鉄塔の傍に小さな小屋があるが、人の気配はない。

　本来ならば、ここにたどり着いた時点で冒険が終わりだったのだが良太が消えてしまった。

「良太ーー！返事しろぉ！良太ぁあ！」

　将太は叫びながら、必死に辺りを見回した。

『白いもの』が良太を抱えているのが見え、将太は走った。

「良太を返せぇえ！」

　掴みかかろうとしたが、ふっと『白いもの』は目の前で消えてしまった。

正確には、鉄塔の横を通り過ぎた瞬間、煙のように消え失せた。鉄塔の向こうには、ただ地面だけしかない。『白いもの』の姿はなかった。

　和子が目を見開いて、口を押さえている。

「本当に違う世界へつながっているとでも言うの？」

　将太は全身から汗が噴き出すのを感じた。学校で聞いた噂は本当なのかもしれない。
心臓の鼓動が痛いぐらいに早くなっている。両手に力を入れ、足を踏ん張らなければ今にも座り込んでしまいそうなほど、怖くて仕方ない。

　噂の通りに化け物が現れ、光のある場所からどこかへ消えていったのだ。

「でも、良太を取り返すんだ、僕が良太を取り返すんだ」

　たとえ帰ってこられなくなるとしても、良太を見捨てることは将太には出来ない。
　もう日常など恐れるものか。

無事に良太を取り返して再会出来るのなら、もう何も怖くはない。

　震える足を叩きつけると、将太は目をつぶって鉄塔の横へ走り出した。

「ま、待って！」

慌てた和子の声がしたが、構わず将太は飛び出した。

　青空。

一面の青空が将太の前に広がっている。

　だが、空以外に将太が分かるものはなかった。丸いものが空中に無数に浮かんでいたり、三角形の円盤のようなものが音もなく走っていたり、表現する言葉が分からないような造形の建造物が一定の間隔を空けて並んでいる。

　ぼんやりとそれらを眺めていると、一人の人間らしきものが将太の前に現れた。

全身を白くて硬そうな物体で包んでおり（将太は宇宙飛行士のようだと思った）、ヘルメットらしき丸いものを頭から外すと、人間の顔があった。

「おめでとう。きみたちはあちらからの“勇気ある脱出者”だ」

　張りのある男性の声がやけに耳に響く。後ろには戸惑った表情の和子が立っていた。

「脱出者？」

　和子がよく理解出来ていないといったあやふやな発音で、男の言葉を反芻した。

「そうです。あなたたちは疑問を感じていたのでしょう？同じことを繰り返す周囲の人間たちに」

　将太と和子は顔を見合わせた。確かに二人は日常に疑問を感じていた。

「無理もありません。彼らはプログラムされた行動パターンを繰り返す、私たちのクローンなのですから。ここはオリジナルが住む世界で、クローンたちはこの光から先に管理してあるのです」

　男の話は、和子と将太を新しい恐怖へ突き落した。クローン？管理？自分たちが、家族が誰かのクローン？

「何を、何を言っているの？クローン？ふざけないで！そんな話聞いたことがないわ！馬鹿げてる！」

　顔を真っ赤にして怒鳴る和子を見ても、男はまるで動じない。

「最初は驚くかもしれませんが、しばらくこの世界にいれば分かりますよ。私の言っていることが真実であることに。時間はたくさんあります。ゆっくりと馴染んでいけばよいのですよ」

「私はこの世界に長くいるつもりなんてないわ！娘が帰ってくるの！」

　言い知れようのない焦りが和子を包む。異常な男、異常なせかい、異常な話。何もかもが和子の理解の許容量を超えている。

「娘のところへ、私は娘のところへ帰るのっ！今度こそいい母親になるって決めたのよ！」

　理由は自分でもよく分からないが、このままでは永遠に娘のところへ帰れなくなる予感がして和子は叫んだ。

「無理ですよ、もう戻れません。ここから向こうの世界へ行くためには準備が」

「おかしなことを言わないで！あなたは気違いよ！私や娘はクローンなんかじゃないわ！」

　和子は男と将太に背を向けて、鉄塔の横へ跳んだ。

（今度こそ、いつも傍にいる優しい母親になるのよ！もう、娘に寂しい思いはさせな）

　そこで和子の意識は途切れた。

　和子は鉄塔の横へ跳んだが、文字通り彼女の姿は消えてしまった。バチっと鋭い音がして、後には何かが焦げた嫌な臭いだけが残った。

「あーあ、せっかく新しいタイプのクローンだったのに。一般のクローンたちは自分のループする日常に疑問を感じないで、ただ年をとって死んでいくんだ。同じ行動を繰り返し続けてね」

　将太は身体が冷たくなっていくのを感じた。周囲の音が、どんどん遠のいていく。

「個性の消滅は成長の消滅なのさ。だから、僕らは」

　目の前には将太のまるで知らない世界が、どこまでも広がっている。これこそが将太の求めた非日常のはずだった。

「良太……」

　男は笑みを浮かべて将太を見た。

「だから、僕らは個性のない人間を隔離することにしたんだ。クローンともどもね。クローンも彼らも個性のないまま生き続ける」

『罪なことだよね』

　男の言葉はもう将太には届いていなかった。

　公園で出会ったおばさんはどうなってしまったのだろう？

　良太はどこへ攫われていってしまったのだろう？

　僕はもうこの世界から帰ることが出来ないのだろうか？

様々な考えが将太の脳内を飛び回ったが、すぐに将太は何も考えられなくなった。

　将太が求めた非日常は、今まさに日常を喰らおうとしていた。

　この境界線は越えてはならなかったのだと、将太は見慣れているはずの青空を見上げながらぼんやりと思った。

　しかし、それは一瞬のことで、将太は青空を初めて見たような気がした。自分が今まで見てきたものは、一体何だったのだろうか。

目を細めながら、じっと空を見つめ、非日常が溢れた世界を将太は一人ふらふらと歩きだした。

境界線

http://p.booklog.jp/book/24005

著者：森山
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/next7/profile

表紙画像：写真素材　足成様
http://www.ashinari.com/

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/24005

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/24005